「元初まりの話」に登場する動物たち（3）

「うを」について ③

おやさと研究所教授
佐藤　孝則　*Takanori Sato*

中国では、サンショウウオのことを「鯢魚」と呼び、オオサンショウウオのことを「大鯢」（図１）、小型サンショウウオのことを「小鯢」（図２）と呼んでいる。たとえば動物分類学的には、「小鯢」は「有尾目 小鯢科 小鯢属」と分類される。ただ日本も戦前までは、「有尾目 鯢魚亜目 山椒魚科」と分類されていたように、「鯢魚」の表現も用いられてきた。しかし、戦後になると、「有尾目 サンショウウオ上科 サンショウウオ科 サンショウウオ属」というように、「鯢魚」の表現はなくなった。

ちなみに台湾では、文献上では「鯢魚」という表現が用いられ、近年も「小鯢科」が用いられることはあったが、戦後になるとほとんどは「山椒魚科」という表現に変わった。これは、戦前の日本語教育の名残があるのではないかと考える。

図１　オオサンショウウオ（「大鯢」）。全長約 60cm。

もとより、「鯢魚」はオオサンショウウオだけを指していたわけではないことも、江戸時代の文献から読み解くことができる。貝原益軒は 1709 年に著わした『大和本草』の「鯢魚」の説明の中で、「…水中ノミニアラズ、陸地ニテヨク歩動ク。…国俗コレヲ山椒魚ト云。四足アリ。大サ二三尺アリ。又小ナルハ五六寸アリ」と記している。すなわち、「鯢魚」には、大きさが２～３尺（約 60 ～ 90cm）の大型のものと、５～６寸（約 15 ～ 18cm）の小型のものがいるというわけである。明らかに、前者はオオサンショウウオ（図１）のことであり、後者は国内に 28 種が分布する小型サンショウウオ（図２）を指している。

図２　カスミサンショウウオ（「小鯢」）。全長約 15cm。

また、小原蘭峡は 1850 年に著した『桃洞遺筆』の「山椒魚」の中で、「…山生魚とも書く。…形状龍盤魚に似て大さ三四寸、…全身泥鰌に似たり」と記している。この中で、小原は大きさが３～４寸の山椒魚（サンショウウオ）は形状が龍盤魚（イモリ）に似ており、全身は泥鰌（ドジョウ）に似ていると解説している。

カスミサンショウウオ（図２）は、山腹から山麓の扇状地にかけて広く分布する小型サンショウウオである。早春、繁殖期の田畑や水路、泥が堆積した水たまりでふつうに観察できるドジョウに似たサンショウウオで、１年のほとんどを陸上で生活し、繁殖のため短期間だけ水中で滞在する。

このカスミサンショウウオは、大和地方では昔から「畑ドジョウ」と呼ばれてきた。田畑の土中で越冬し、早春になると土中から姿を現す。ドジョウも同じような場所で同じように土中で数匹が塊になって越冬し、春に姿を現す。そして田畑の水路や水たまりに入って繁殖する。

これは、「畑ドジョウ」とドジョウが、ある時期、泥水の中で混棲していることを示している。

実際、ドジョウがたくさんいる中をよく見澄ますと「畑ドジョウ」、すなわち「鯢魚」が混じっていることがある。この状況は、幕末から明治にかけて、農業に従事する人たちにはふつうに観察でき、理解できたはずである。むしろ当時の人たちの方が、ドジョウと「畑ドジョウ」との関係を良く知っていたのではないだろうか。

いずれにおいても、「大鯢」すなわちオオサンショウウオは国の特別天然記念物に指定されるまで、乱獲され、食されたりしてきたため、生息場所は今よりも限定されていたと考える。そのことを示す一つの事例がある。

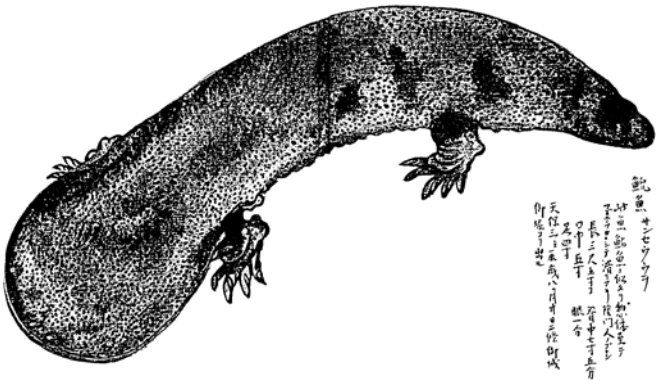

図３　鯢魚（『本草図説』より）。図はオオサンショウウオを示す。

高木春山が 1852 年に描いた『本草図説』の「鯢魚」の項で、普段は山地渓流域に生息するオオサンショウウオが「天保三年八月二十日二条御城御堀ヨリ出ル」と記しているように（図３）、「大鯢」は幕末においても珍しく、話題性に富んだ動物だったようである。

古代の地誌とされる『山海経』の「北山経」に、「水中に人魚多し。その状は「鯥魚」の如く、四つの足、その声は嬰児のよう」とある。人魚は「鯥魚」のようであり、鳴き声は嬰児に似ているという。このような「嬰児の啼くような声に似た」という表現は、多くの文献から見いだされる。おそらく、人間の嬰児が泣（啼）く声に似た音を出す魚という意味で、魚偏に啼くという漢字の「鯥」の字があてられたものと考える。また、「鯢」は人間の嬰児ということで、魚偏に児童という意味でこの漢字があてられたのではないだろうか。いずれの文字も、人間と関わる魚ということで「人魚」とも表現されてきた。ちなみに、『和漢三才図会』全 105 冊を満 14 歳で筆写を完了させた南方熊楠も、「人魚」は「鯢魚」と同じだと判断していた。

いずれにせよ、「鯥魚」や「鯢魚」が以前から「人魚」と呼ばれていたことは、間違いないようである。